

中学校のバレーボール授業における男女共習と別習の違いが 生徒の学びに与える影響

槇山 光姫 (滋賀大学)

1. 目的

本研究の目的は、中学生を対象に男女共習と男女別習のバレーボール授業を実施し、共習と別習の違いが生徒の学習意欲、技能および運動強度に与える影響について明らかにすることである。

2. 研究方法

- 1) 対象者：中学校2年生70名(1クラス男子17名、女子18名の2クラス)であった。
- 2) 対象授業：バレーボール(全9時間)。
- 3) 調査内容：①体育授業に関するアンケート(事前・事後アンケート調査)、②形成的授業評価(毎授業後の振り返りシート)、③運動強度(第3時、第6時、第7時、第8時、第9時)、④技能評価(直上アンダー、直上オーバー)。

3. 結果と考察

- 1) 事前・事後アンケート調査：項目7「バレーボールを楽しむ」、項目8「協力し、励まし合い」において、別習群が共習群より有意に高値を示した。このことから、男女別習で授業を行う方がより生徒がバレーボールを楽しんで、協力や励まし合いながら、学習に取り組んでいたことが推察される。
- 2) 毎授業後の振り返りシート：多重比較検定の結果、項目3「わかったこと」では、第1時と第2時において、別習群が共習群より高値であった。項目6「進んで学習」では、第1時、第2時、第3時において、別習群が共習群より高値であった。項目7「めあてを持って学習」では、第1時と第

3時において、別習群が共習群より高値であった。このことから、男女別習で授業を行うことでより生徒が授業を楽しみながら、同性同士で動き方のポイントを確認し合う機会があり、動き方がわかることで目的やめあてを持って授業に取り組めたりすると考えられる。

3) 各授業時間における運動強度：男子と女子ともに第8時に有意差が認められた。加えて、女子では第9時に有意差が認められた。その要因として、第1時から第7時まではパスを基本とする授業内容だったが、第8時から試合が行われたため、男女共習と別習の違いが生徒の運動強度に影響を及ぼしたのではないかと推察する。このことから、共習と別習の違いが男子と女子の運動強度に影響を及ぼしていることが明らかとなった。

4) 技能評価：直上アンダーおよび直上オーバーとも全体的に両群とも技能の向上が見られた。直上アンダーでは、「膝」および「連動」の項目において別習群に技能の向上が見られた。

4. 結論

中学校保健体育科のバレーボール授業においては、男女別習の授業形態は生徒の体育に対する意識、学習意欲、技能向上および運動強度の確保に効果的であると考えられる。

5. 主な参考文献

- 1) 宮本乙女(2020) 体育の男女共習・別習を考える, 体育科教育学研究, 36(2):27-32.